

令和3年度 個人評価の集計・分析

芸術地域デザイン学部

評価委員会

令和4年9月

目 次

1	個人評価の実施状況	
	(1) 対象教員数、実施率等	3
	(2) 実施概要	3
2	評価領域別の集計及び分析	
	(1) 教育の領域	5
	(2) 研究の領域	6
	(3) 国際・社会貢献の領域	7
	(4) 組織運営の領域	8

1 個人評価の実施状況

(1) 対象教員数、実施率等

令和3年度個人評価では、対象となる教員23人全員が活動実績の報告を行った。

令和3年度個人評価実施率

コース	対象教員数 (人)	未提出者数 (人)	実施率 (%)
芸術表現コース	10	0	100
地域デザインコース	13	0	100
合計	23	0	100

(2) 実施概要

① 評価組織の構成

学部長	吉住 磨子
教育研究評議員	田中 右紀
副学部長	山崎 功
副学部長	有馬 隆文
芸術表現コース	徳安 和博
地域デザインコース	中村 隆敏
事務長	馬場 勝利

② 実施内容、方法

佐賀大学芸術地域デザイン学部における教員の個人評価に関する実施基準（平成28年7月20日制定）に基づき、令和2年度の活動実績について、4領域（教育、研究、国際交流・社会貢献、組織運営）の個人評価を行った。

③ 個人評価の経緯等

- ・令和4年4月21日（木）付で徳安副評価委員長から、対象教員に対し、個人評価関係書類（活動実績報告書（様式2）、自己点検・評価書（様式3））をメールにて送信し、令和4年5月20日（金）までに、コース担当者（芸術表現コース：徳安、地域デザインコース：中村）に提出するよう依頼した。
- ・提出された関係書類（様式2、3）について、学部評価委員会を開催し審査を開始した。対象教員23人全員の個人評価を行った結果、各教員による自己点検・評価の結果は、概ね妥当と判断した。
- ・学部長から、対象教員に対し、令和4年7月22日（金）付で個人評価結果を通知した。その際、評価結果に対して不服がある場合は、令和4年8月19日（金）までに不服申立書（様式任意）を学部長あて提出するよう付記した。
- ・不服申立書を提出した教員はいなかった。

④ コースごとの個人評価結果と平均値は、以下のとおりである。

令和3年度個人評価結果 単位：人

	芸術表現 コース	地域デザイン コース	計
5.0～4.5 以上	9	11	20
4.5 未満～4.0 以上	0	1	1
4.0 未満～3.5 以上	1	1	2
3.5 未満	0	0	0
計	10	13	23

令和3年度個人評価平均点

	芸術表現 コース	地域デザイン コース	学部平均
教育領域	1.65	1.65	1.65
研究領域	1.28	1.36	1.32
社会貢献・国際交流領域	0.83	0.88	0.86
組織運営領域	1.10	0.90	0.98
計	4.86	4.74	4.79

2 評価領域別の集計及び分析

(1) 教育の領域

個人評価平均点をみると、教育領域の学部全体の平均点は1.65であり、前年度から0.01ポイントの微減であった（芸術表現コースが1.69から1.65、地域デザインコースが1.63から1.65）。両コースとも高得点を維持している。事項別にみると、まず講義時間数は芸術表現コース5376時間、地域デザインコース6219時間と総時間数には大きな差がみられる。一方、ひとりあたりの平均授業担当時間は、前者が537時間、後者が478時間となっている。この背景には教員の退職に伴うコースごとの現員数の違い、表現系における実技指導負担が大きいことがあると推測される。ただこうした講義時間数に反映されない正規講義時限以外の教育指導（正規単位化されていないいわゆるゼミ指導等を含む）が実技系、非実技系問わず実施されていることも留意する必要がある。教育改善の実績事項においては、公開授業の件数が大きく増加した。学生支援面においては、学生の海外派遣は増加に転じたものの、短期プログラム等による留学生指導の件数など留学関連項目は減少しており、コロナ収束後を見通した改善を図りたい。研究指導の面においては、コロナ禍の影響により減少・停滞していた研究成果発表の指導件数を大幅に増やすことができた。オンライン活用等、対面制限を補う様々な努力もあり学部としての教育領域取り組み件数は一定レベルを維持できている。引き続き、充実を図っていきたい。

領域	事項	区分	芸術表現 コース	地域デザイン コース	計(A)	
教育	講義	教養教育担当時間数	419	529.5	948.5	
		学部担当時間数	3981	4613	8594	
		大学院担当時間数	976	1076	2052	
	教育改善の実績	授業評価を参考に授業内容・方法の改善		9	11	20
		授業のための教材等の作成		9	8	17
		教育内容等に関する研究活動		7	7	14
		TA・RAの採用		3	1	4
		HPを通じた全ての担当科目のシラバス公開		10	12	22
		HPを通じた全ての担当科目の成績評価の方法・基準等の作成		9	12	21
		教育関係の研修への参加		8	7	15
		リメディアル教育の実施		3	1	4
		公開授業の実施		1	4	5
		その他の教育改善		2	3	5
	学生支援の実績	オフィスアワーの実施		9	13	22
		研究生の指導		1	2	3
		学生研修の引率		3	3	6
		就職のための特別指導		6	7	13
		学生の海外派遣		1	0	1
		短期プロ等による留学生指導		0	0	0
		学年担任、クラブ顧問		10	12	22
		留学生・社会人・障害者の持続的な生活指導等		2	3	5
		その他の学生支援		4	3	7
		研究指導	学部主査(件)		32	64
	学部副査(件)			0	58	58
	大学院主査(件)			7	6	13
	大学院副査(件)			14	7	21
	研究成果発表の指導(件)			20	2	22

(2) 研究の領域

芸術表現コースと地域デザインコースでは、教員の研究のスタイルが大きく異なり、前者では「国内外学術活動」(29件)や「国内外での専門分野の学術活動」(9件)や「国内学会賞等」(6件)での実施件数が多いのに対し、後者では「学会発表等」(26件)や「専門書等の出版」(12件)での実施件数が多い。表中からはコロナ過の影響も見て取れる。「全国規模の芸術活動・演奏活動・競技活動」は前年度に比べ36%減、「学会出席」では前年度に比べ92%減と大きく減少しており、コロナ過が全国規模の学術活動に影響をおよぼしていると考えられる。コロナの影響はあるにしろ、それぞれの分野の特色を活かした研究活動が活発に行われており、次年度以降も継続したい。外部資金に関しては、研究責任者としての採択が芸術表現コースと地域デザインコース合わせて10.5件と増加しており、良い傾向であるが、厳しい財政上を考えると更なる努力が求められる。

領域	事項	区分	芸術表現コース	地域デザインコース	計
研究	専門書等の出版	母国語&単著(編)	0	0	0
		母国語&共著(編)	2	10	12
		母国語以外&単著(編)	0	0	0
		母国語以外&共著(編)	1	2	3
	国内外学術活動	全国規模の芸術活動・演奏活動・競技活動(件)	11	5	16
		その他の芸術活動・演奏活動・競技活動(件)	16	10	26
		海外での芸術活動・演奏活動・競技活動(件)	2	3	5
	国内学術雑誌への記載	第一著者&審査制(編)	7	2	9
		第一著者&無審査制(編)	0	1	1
		第一著者&紀要	2	4	6
		第一著者以外&審査制(編)	1	2	3
		第一著者以外&無審査制(編)	0	0	0
		第一著者以外&紀要	1	0	1
	海外学術雑誌への記載	第一著者&審査制(編)	0	1	1
		第一著者&無審査制(編)	0	1	1
		第一著者&紀要	0	0	0
		第一著者以外&審査制(編)	2.5	1	3.5
		第一著者以外&無審査制(編)	0	0	0
		第一著者以外&紀要	0	0	0
	国内外学術講演	海外(回)	2	2	4
		国内(回)	4	4	8
		国内での専門分野の学術活動(件)	5	5	10
		海外での専門分野の学術活動(件)	4	6	10
		国内学会賞等(件)	6	0	6
		海外学会賞等(件)	0	1	1
		国内学会の開催(件)	2	4	6
		海外学会の開催(件)	1.5	0	1.5
	学会発表等	研究発表(件)	3	12	15
		座長等(件)	0	14	14
		学会出席(回)	0.2	3	3.2
	外部資金(科学研究費を含む)申請	採択(研究責任者)(件)	3.5	7	10.5
		採択(分担者)(件)	0	6	6
採択(研究協力者)(件)		0	0	0	
不採択(件)		9	8	17	
国内外共同研究	海外(件)	0	2	2	
	国内(件)	0	5	5	
	特許等	0	0	0	
	その他(件)	4	5	9	

(3) 国際・社会貢献の領域

国際貢献領域では、新型コロナウイルス流行の終息が見えず、人的交流の凍結が継続される中、オンラインでの国際交流運営9件(前年比350%増)、参加6件(前年比200%増)など、制約の中でできる取り組みを模索した。イスラエル・ベツアルエルデザインアカデミーとの合同企画、展示とオンライン交流発表などはその好例となった。また、オンラインを活用したウェビナーや学生交流、リモート研修なども韓国、中国、アルメニアなどとの間で行われた。SPACE-ARITAの国際交流授業については、国外渡航凍結につき希望学生はいるものの、実現を見なかった。

社会貢献領域では、国や自治体など行政組織の審議委員44件、組織協力28件、講習会等62件、公開講座8件と、各教員の専門分野を活かした地域貢献が顕著である。特に講習会・公開講座は、昨年度までのコロナ禍による中止や延期から、オンラインや配慮した中での対面の実施などで昨年比講習会51%増、公開講座167%増の伸びとなった。また、芸術表現を活かした地域探求や地域での表現活動による地域貢献も盛んにおこなわれ、対象地区は武雄市、鹿島市、佐賀市、吉野ヶ里町、有田町、久留米市、オンラインなど13件となった。コロナ禍においても、国内外、地域社会を結ぶ国際・社会貢献の展開が現れてきた。

領域	事項	区分	芸術表現 コース	地域デザイン コース	計
国際 交流 ・ 社会 貢献	国際貢献				
	国際交流(件)	運営	5	4	9
		海外参加	6	0	6
		国内参加	5	2	7
	国際学会(件)	運営	1	1	2
		海外参加	1	3	4
		国内参加	0	1	1
	交流協定(件)		2	1	3
	国際協力(件)		2	1	3
	共同研究者の受け入れ(件)		0	0	0
	HP(外国語版を含む)		6	9	15
	地域貢献				
	審議委員(件)		18	26	44
	組織協力(件)		15	13	28
	講習会等(件)		40	22	62
	マスコミ(件)		9	10	19
	技術移転(件)		1	3	4
	社会参加(件)	組織を運営	1	1	2
		個人参加	3	1	4
	公開講座(件)		2	6	8
附属学校園等での共同研究(件)		1	0	1	
附属学校園等での指導助言(件)		1	0	1	
その他(件)		14	4	18	

(4) 組織運営の領域

新任教員を含め、教員全員が各々多くの全学・学部委員会に携わり、円滑に運営されている。ただし学部教員 23 人に対し、学部委員会のポストが約 70、全学委員会が約 90 あり、多い者は 10 以上、少なめの者でも 5 つの委員会活動には当たらねばならないのが実情で、半数以上は委員長としての立場にもある。全学教育機構運営委員・部会長の担当数も増加している。教員数の多い学部とは自ずと負荷の度合いが異なり、全学的に DX 化をさらに推進し、実効性のある整理・統合や簡素化も望まれる。

自己点検評価の重み配分は低めに設定する教員が多いが、それぞれの任にあたる中、負荷は配分を上回るか、他の領域を圧迫しかねない。また、各教員の負荷は極力公平になることが理想だが、委員会によって仕事量に大きな差もあり、教務や入試、就職などは特に負荷が大きい。なお、遠隔の有田キャンパスには、教務・入試・学生・就職など、コアな委員会を中心に有田キャンパス所属教員を充てて対応している。

領域	事項	区分	芸術表現 コース	地域デザイン コース	計
組織 運営	学長特別補佐・評議員・全学委員等の活動・過半数代表(件)		14	37	51
	学部長・副学部長・佐賀大学美術館副館長(件)		1	3	4
	学部・課程の委員・検討部会等の委員(件)		35	30	65
	教授会・委員会の出席 実績	教授会出席	10	13	23
		研究科委員会出席	10	11	21
	大学や学部が開催する行事への参加(件)		18	13	31
	学部の代表として全国・地区の会議・研修への参加(件)		5	1	6
	全学教育機構運営委員・部会長(件)		4	1	5
	入試における出題委員・採点委員等(件)		85	59	144
その他(件)		6	2	8	